

No.85 2020.4

# 同経会報

- 春号 -



新島襄先生の言葉  
海外インターンシップ報告  
卒業生のつどい 大阪・東京  
卒業生からの便り  
同経会賞受賞者からの便り  
特別インタビュー 八田英二氏  
卒業生インタビュー 砂連尾理氏  
現役学生が語る「わがゼミ」

殖産のみを主とすれば、利のみに越<sup>は</sup>るの憂いあり。

出典：同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波文庫 293頁

成程学問のみに走らせ、信仰の道その脳中に働かざれば、  
学問はあぶない。

出典：同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波文庫 243頁



## 同経会会長からのご挨拶

同経会会長 服部盛隆



同経会の皆さん、お変わりございませんか。昨年同経会は、宿願の「名古屋支部」を立ち上げることができました。ご関係の皆さん、ご苦勞様でした。有難うございました。名古屋で、或いは全国で、ますます同経会の交流が深まりますことを期待致します。

また、会員相互の交流の機会を増やすツールとして、同経会名簿を「Web名簿」として皆様に登録をお願いしております。

5万人を超える経済学部ご卒業の皆様に登録頂ければ、プライバシーなどに配慮しつつも、

貴重な情報として、幅広く有効に使って頂けるものと期待しております。

更に、経済学部との関連では、例年通り海外インターンシップを行い5名の方が参加されました。お世話になった企業の皆さん、学部学生の皆さんと意見交換会も行いました。

そして、同経会は2021年11月に60周年を迎えます。記念の催しなどを目下委員長会議で具体的な検討を進めております。

ところで、大変感銘を受けた記事を拝見しました。同志社大学通信「one purpose 198号」で、国際ラグビーボードに殿堂入りされた、OBで元大阪体育大学ラグビー部監督の坂田好弘さんが新島襄先生の言葉を紹介されていました。坂田さん曰く、新島先生は「男子一戦して敗れるも止むなかれ。再戦して止むなかれ。三戦して止むなかれ。刀折れ矢尽きても止むなかれ。骨砕け血尽きて止むべきのみ。」

私の鳴尾ゴルフ倶楽部の仲間に、菅野さんがおられます。同志社から神戸製鋼、そして日本のウイングとして活躍された方ですが、菅野さんにお聞きしましたら、「新島先生のこの言葉は、岩倉のラグビー部の部室にありました。素晴らしい言葉でした」と話されました。

坂田さんは更に、「同志社は新島襄先生が創

立して以来脈々として受け継がれてきた気高い伝統と精神を有する大学です。この気迫を胸に刻み日本一を目指して欲しいと願っています。」とされました。

昨年はラグビーワールドカップが日本で開催され、いわゆるわかファンも含めて大いに盛り上がりました。確か同志社ラグビー部は、慶応、三高に次いで日本で三番目の歴史をもつと記憶しておりますが、古くからのファンとしてラグビー部の活躍を密かに期待し続けております。なお、坂田さんも菅野さんも経済学部のご出身です。

話は変わりますが、昨年12月に令和元年最後の5学部連絡会が開催されOB会相互の連携を一層深めました。同じ月に、校友会上海支部で海外大懇親会が開催されました。井上校友会会長、八田総長理事長、松岡学長をはじめ総勢140名が参加され、盛大裡に開催されました。海外支部は36支部に拡大されたようです。井上会長などのご配慮で、得難い体験ができました。お世話になりました。有難うございました。

ご存知のとおり、2025年に同志社は150周年を迎えます。同経会として大学に50万円を寄付致しました。同経会会員の皆様も母校への思いをお考え頂けたら幸いです。今年も世界は予測の難しい年になりそうです。皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。



## 経済学部長からのご挨拶

経済学部長 角井正幸



2020年度より経済学部長を務めることとなりました角井と申します。よろしくお願いいたします。

同経会会員の皆さまにおかれましては、平素より経済学部の教育ならびに研究活動に多大なるご支援を賜りましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。

同経会の皆さまにはさまざまな面から経済学部をサポートいただいておりますが、特に個々の学生との関わりが深い海外インターンシッププログラムや同経会賞の授与を通して学生の成長を助けていただいております。

毎年、卒業式の日と同経会賞の授賞式が行われている光景を見ると、4年間学問に打ち込ん

でいた学生たちの成果が形となって評価されることのありがたさを感じずにはいられません。真摯に学問に取り組む学生にとって、同経会の皆さまのご支援が何よりも大きな助けとなっております。

また、海外インターンシップについて思いを巡らせてみると、参加した学生のコメントからは、「社会の中で働くために必要な心構え」や「苦勞したこと」、そして「周囲の人々への感謝」が読み取れます。

これらはいずれも、多くの学生が経験する授業、クラブ・サークル、アルバイトといった普段の学生生活ではあまり気付かないことを学生たちが学んだことを表していると思います。

そして、この「気付き」を通して学生たちは「学生として今しておくべきこと」を見出し、より充実した学生生活へと戻ってきています。

当然のことながら大学は日々の学修を通して多くの学びを提供しますが、その学びの中で「どのように学ぶのか」や「どのように問題に取り組むのか」といった「姿勢」が問われます。

この「姿勢」を身に付けた学生は、課外活動や学外の活動の中でもその特性を活かして活躍しています。このようにして学生は、教室での学び以外にもあらゆる場面で成長していくわけです。

大学と社会とのつながりについて考えると

き、このような恵まれた機会の中で自ら考え、気付き、自らの成長を自覚する人物を育てることの意義を感じます。

私たち経済学部の教職員一同は、このことを心にとめ、学生たちと接していきたいと考えています。

そして、経済学部がなお一層の発展を遂げるためには、教職員のみならず学生たちの活躍が必要です。

その学生たちの活躍について、「同経会報」が多くの情報を皆さんに届けてくださっています。

卒業生の皆さまにおかれましては、「同経会報」を通して学生たちの活躍に触れていただきますとともに、今後とも経済学部・経済学研究科の活動に社会の中で活躍する先輩としてご助言をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

新島襄先生の言葉	2
同経会会長からのご挨拶	4
経済学部長からのご挨拶	5
海外インターンシップについて	8
卒業生のつどい 大阪	14
卒業生のつどい 東京	17
卒業生からの便り	18
同経会賞受賞者からの便り	19
特別インタビュー 八田英二氏	22
卒業生インタビュー 砂連尾理氏	26
退任の先生のご紹介	31
現役学生が語るわがゼミ	32
同経会役員名簿	34

編集後記

編集後記

広報・編集委員会を大ベテランの先輩方から引き継ぎ、4年余りが経とうとしています。どのように進めたら良いものか、不安を抱きながらのスタートでしたが、皆様方のお力添えのお陰で、号を重ねることができました。2年目を過ぎた頃から、ようやく慣れてきた委員会活動。その広報・編集委員会の楽しみの一つは企画会議。会報作りはここからスタート。作り手が楽しくなければ、良いものではありません。各々からあれこれとアイデアが飛び出し、話題満載。話が盛り上がり、予定時間をオーバーすることもしばしば。さらに充実した会報を作るべく、英知を結集しています。

もう一つの楽しみはインタビュー。特別インタビューでは、先輩方から貴重なお時間を頂戴し、いろいろとお話を伺います。緊張感を持って始まるインタビューも、時間の経過と共に次第に気分も解れ、普段、会合で一緒に過ごしていたく時とは違った、親近感溢れる素顔にお目にかかれることも。何とも嬉しい瞬間です。

そして今回から、各方面で活躍している卒業生のインタビューがスタートします。トップバッターは砂連尾理さん。

3年越しの念願が叶いました。お出迎え下さった砂連尾さんは、スマートなお姿でもお洒落。ファッショナブルなスニーカーに、いち早く目を留められたのは、流石に観察力の鋭い編集委員長でした。

ダンススタジオでのインタビューで、一番の注目は手の動き。その綺麗なこと。ペットボトルの蓋を開け閉めされる、流れるような指の動き。マフラーを扱われる時の、舞うような手の動き。正にすべてがダンス。仕事柄、所作（とりわけ手の動き）が気になる私の視線は終始手に、否、手だけではありません、もちろんお顔にも釘付けでした。教鞭を執られている大学では、ダンス（身体表現）を学ぶためには、哲学を必修としていらつしやるとのこと。芸術にも理論武装が必要であることを知りました。和やかな雰囲気の中で、インタビューは進みます。肝心のお仕事はと言うと、何から何まで編集委員長におんぶに抱っこ。頼もしい編集委員長に、ただただ感謝あるのみであります。新しいスタイルの会報になって4度目の春号は、如何でしたでしょうか。皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。（広報委員長）

同経会では、学部の卒業生にさまざまな情報をリアルタイムで発信していくため、ホームページを運営しております。

2013年12月にホームページを全面的にリニューアル、2014年5月からはスマートフォンやタブレットへも情報提供できるようシステムを構築しました。

そのホームページを維持、更新していくため、バナー広告、同経会サポーターイングカンパニー（同経会SC）広告を出稿して下さる法人様個人様を随時募集しております。

つきましては、趣旨にご賛同いただき、引き続き広告掲載を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

広告の掲載要領、広告料金など詳しくは事務局までお問い合わせくださいませ。

お問い合わせ先…  
京都市上京区今出川通烏丸東入  
同経会事務局  
TEL: 075-251-3524

同経会ホームページ  
広告出稿のお願い





## 海外インターンシップについて



2019年度の海外インターンシップ事業は、ダイキン工業株式会社様、株式会社石田大成社様、株式会社鶴見製作所様、みずほ銀行デュセルドルフ支店様、日本コルマー株式会社様の協力を得て実施しました。心より感謝申し上げます。研修生として参加したのは、5名です。経済学部の先生方、事務室の皆様をはじめご協力いただいたすべての方々には厚く御礼申し上げます。

### 海外で働くということ



ダイキン工業株式会社にて  
田野智之

当インターンシッププログラムに参加できたこと、本当に嬉しく感じます。

ビジネスの場には、留学等で経験する海外のアカデミックな場とは違った厳しさや新鮮さがあり、良いものが得られたと感じております。

当海外インターンシップに志願した理由は、海外で働く経験をすることで将来海外赴任をし

仕事に取り組むことができると考えたのも一因です。さらに、日本人が多くない環境で働く経験をしたかったことも挙げられます。私は比較的環境に甘えてしまう傾向にあったため、日本人の社員の方が多く働く環境では日本人に頼ってしまい、当海外インターンシップを有効に活用できないと考えました。また、それまでアカデミックイングリッシュばかり学習してきた自分の英語力が、ビジネスの場面でどの程度使えるのか試したい思いもありました。

DAIKIN AIR CONDITIONING (VIETNAM) JOINT STOCK COMPANY の2週間は以下の通りでした。概ね、第1週は学習、第2週は受け入れ先企業から与えられた課題に取り組む、というものでした。第1週は、製品やベトナム市場について学んだ後、2日間現地の家電量販店を回りディスプレイや販売方法についてお話を伺ったり見学をしたりしました。第2週は retail support 部門と marketing 部門から各2つの課題が与えられ、第1週で収集した知識や考えを基にその課題に取り組ましました。それらは主に家庭用エアコンと空気清浄機のマーケティングに関する課題でした。最終的に、プレゼンテーションの機会は得られませんでした。課題のために作成した資料を提出して終了しました。自分の案が採用されるのかはまだ分かりませんが、「よくやった」とお褒

たいという自分の志向をより明確にすることができると考えたからです。また5社ある中で以下の3つの理由から特にダイキン工業株式会社を志願しました。ベトナムでのインターンシップに参加できること、ヒトの健康や衛生に関わる業界で活躍されていること、現地法人で働く方はほとんどが現地の方であることです。

現在、多くの日本企業が生産拠点を構えマーケットに進出している東南アジア・ベトナム内部のマーケットについて知ることは、私の研究・就職活動・キャリア形成に非常に有益であると考えました。私自身、グローバル資本主義をテーマとするゼミに所属しており、グローバル化における日本企業について学習・研究しております。日本の企業活動において東南アジアは切り離すことのできない関係にあり、ゼミ学習においてもしばしば登場してきました。中でもベトナムは東南アジアの一国であるだけでなく、生産拠点としても国内マーケットとしても魅力的で、多くの日本企業が進出しているため、日本経済にとって最も身近な国の一つだと考えております。そのマーケットで働くことは今後の研究活動で東南アジア市場について考え

めいただきました。この2週間で私は非常に多くの事柄を学びました。中でも実際にマーケットの中に入ってみないと分からなかった日本との違いは印象的でした。

例えば、ベトナム人は made in Vietnam / China を敬遠するといった国民性のような事柄や、量販店におけるディスプレイ・人員配置・製品配置の方法、ベトナム人の生活など、広範囲に違いがあり、そうした違いを理解しより良い戦略を策定するために海外駐在員が必要である、と実感しました。このことは、今後自分が海外赴任を真に希望するのか、またその理由を深く掘り下げる契機になったと考えます。

ダイキン工業株式会社は当インターンシップに対して非常に真摯に取り組んでくださり、派遣先では考えられたスケジュールの下、非常に豊かな経験が経験をすることができます。派遣先の選定から、世界各地のランチオフィスの中から派遣学生が本当に有意義な経験ができるように、近年では東南アジアを中心に毎年異なるオフィスに対して調整を働きかけてくださります。ベトナムは英語を母国語としない国であり、ベトナム人英語の理解に戸惑い、生活では英語が通じないといった、言語上の障壁を感じることはありますが、就職活動をするうえで、成長市場に飛び込む経験は企業の成長を実感し、成長を思い描くことができるという点で

る上で価値ある経験であると考えました。また将来、東南アジア諸国への赴任も十分想定されるため、海外赴任をしたいという志向を裏付ける経験であるとも考えました。また、ダイキン工業株式会社の主力、空調分野は健康や衛生に関わり、経済的に豊かになるほど需要が見込まれ、特にベトナムのような途上国では成長市場であると考えました。そうした成長分野ではより挑戦的な経験ができると考え、魅力的でした。また、より安心・安全が求められる分野であり、日本企業が優位性を発揮して規模の大きい



汎用性の高い経験だと考えます。また、個人的には「失われた20年」で生まれ育ってきたため感じたこととなった街全体の成長、流動的な社会を実感できたことにはワクワクしました。10年、20年後に再び訪れ違いを実感したいと感じさせるほどです。課題に追われ苦しいこともあるかもしれませんが、あつという間の2週間を過ごすことになると思いますので、特に海外経験が多くない学生ほど、頑張って行ってもらいたいと思います。





実務から得た学びと課題

株式会社石田大成社にて

橋本紗矢香



今夏、石田大成社テキサス州ダラス支店「ITP strategic」にて8月19日から30日まで、2週間のインターシップに参加させていただきました。2017年、米国トヨタのダラス移転に伴い開設され、主に印刷・ローカライゼーション・マーケティング・教育を通じた自動車

グローバルに活躍するために

株式会社鶴見製作所にて

菅村衣織



9月2日から9月12日の間、TURKUMI PUMP TAIWAN CO. LTD.でインターシップに参加させていただきました。株式会社鶴見製作所は水中ポンプを主として水に関わる機器を生産し、その技術と品質の高さが世界でも認められている会社です。普段私たちがポンプの存在を意識することはほとんど

産業関連業務が行われています。石田大成社のインターシップに参加した目的・理由は、「ITP」 「世界で必要とされる人材」 「自身の現能力」 この三つを知り、学ぶことで、今後の成長につなげることができると考えたからです。このインターシップの内容は主に「会議への参加」「各事業・役職に関する講義」「個人課題」で構成され、一つ目の「会議への参加」というのは、毎朝行われる他支店とのテレビ会議に参加することでした。そこでは「自工程完結」を成すために、精密な情報共有やスケジュール管理などが行われ、会議が会社や社員にとってどれだけ重要であるのかということに気づきました。二つ目の内容では、人事・翻訳・会計など様々な役割についての説明を受けました。ダラス支店の社員の方々大半が複数の事業や役職を担当されており、グローバル企業で必要とされる人材のレベルが高いことを痛感しました。三つ目の個人課題では「百年に一度の変革期」を迎えている自動車産業への事業を展開するITP strategicの課題・経営状態を分析・予測し、中期経営計画を立て、それを最終日に発表するというものでした。非常に難しい課題ではありましたが、講義や社員の方々の期待を超えるプレゼンテーションをしたい一心で、懸命に取り組むことができました。このインターシップを経て気づいたことや学んだことが沢山

ないと思いますが、それはいい換えれば、私たちが気づかないほど自然に生活を支えてくれているということに他なりません。ツルミポンプはテーマパークの噴水、瀬戸大橋や主要空港の建設にも使用されており、様々な場面で活躍しています。

海外インターシップへ参加した目的は二つあります。一つ目は、海外で活躍する日系企業で生産過程と経営全般について学び、日本と海外の関わり方を知るためです。二つ目は、将来のキャリアについて考える上で、実際に海外で働くことを通じてグローバルに活躍するために何が必要か学ぶためです。

現地では、主に営業に同行させていただきました。営業先では、お客様との会話を通じて製品と異文化への理解を深め、コミュニケーションの重要性を実感しました。文化や習慣の違いは購買意欲に直接関わってくるため、会話からまずは現地の方の考え方を理解しようと試みしました。そして、営業において、潜在化しているニーズの読み取り、次の商談に繋がるような信頼関係の構築、要望にすぐ応えるための準備と引き継ぎ等、情報共有が大切であると学びました。

今回、営業同行に加え、実際に念願の生産現場を余すところなく拝見させていただきました。職種

あります。まず、自分が学んできたこと・既存のこの範囲は本当に小さいということです。ビジネス上でのコミュニケーションを円滑にするには、基本的なものを越えた雑学や知識が必要だということを知りました。海外ではより一層の知識が必要とされます。今後は興味のあることを制限せず、様々なことに関心を持ち、学習していきたいと思っています。二つ目に気づいたことは、英語はコミュニケーション手段に過ぎないということです。当プログラムに参加するまでは、英語を流暢に使えるようになった後、海外で勤務したいと考えていました。しかし、現在ではご存知のように公用語が英語であり、母国語のように利用できる方々が沢山います。ITP strategicの社員の方々を見て、英語が使えるのは勿論のこと、それに加えて何か専門的な知識を身に付ける必要があると感じました。これらに気づくことができたことは私にとって非常に大きなことだと思っております。この2週間は本当に貴重な体験ばかりの日々で、多くの方々から教えていただいたことや様々な経験を通して、自身の今後の課題に気づくことができました。どの時代でも必要とされ、また発展し続ける株式会社石田大成社のように、自身も変化すること、挑戦することを恐れず、成長し続けたいと思います。

た。そのため、本社から求められる品質基準を満たす要となる生産ラインの仕組みや管理システムを始めとする、製品の質と工場全体の効率の両方を向上させるような工夫に富んだ経営について、多角的に知ることができました。また、現地の方々のキャリアについて伺い、いただいたアドバイスに基づき自身のキャリアについて考えることができました。海外インターシップを通して、日本と海外の関わり方を学ぶとともに、日本にいる時には気づかなかった特徴や良さを再認識し、自国についてもっと学ばなければならぬという思いに駆られました。そして、グローバルに活躍する人材になるには、柔軟に異文化を受容し素早く対応する能力、自国に対する深い知識、情報を分析する能力、主張力、そして、自分一人の言動を通して日本という国を見られているという自覚と責任を持つことが不可欠であると学びました。

今回の経験から得た学びや現地の皆さんがくださったアドバイスは私にとってかけがえのない財産です。これらを糧に、将来グローバルに活躍できる人材になるべくこれからも精進いたします。

この場をお借りして、多大なご尽力を賜りました全ての皆様に厚く御礼申し上げます。貴重な経験をさせていただきました、本当にありがとうございます。



充実した2週間

株式会社みずほ銀行にて

跡見昂平



今回、私はみずほ銀行デュッセルドルフ支店でインターンシップをさせていただきました。

海外に行くこと自体が初めてで始まるまでは不安でいっぱいでしたが、周りの社員さん方のサポートもあり、しっかりと自分の力を発揮して取り組むことができた2週間でした。

さて、私がこのインターンシップに応募した理由としては主に2つあります。まず、「将来は英語力を生かして働きたい」と考えていたことです。これからの時代、就職する時には国際

的な視野を持つことが必要だと感じ、この考えを常に持っていました。

次に、「銀行などの金融機関の業務内容を詳しく知りたい」といった興味があります。これは預金管理等だけではなく与信や営業の仕組みなども学んで、今後社会に出た際の自分のキャリア形成につなげていきたいと関心を持っていたからです。

実際にインターンシップが始まると、初日から多くの内容を教えていただき、それらに取り組みました。ここでは、そのうちの2つを取り上げます。まずは、「銀行業務についての講義」です。支店内のほぼ全ての部署の方から、新規顧客への対応や取引先の信用度に応じた資金貸し出しの仕組み、監査等における管理のフローなどをはじめとした様々なことを学習しました。多くの銀行業務の内容を学習できとても有意義な時間を過ごすことができました。

また、それに加えて最も印象に残ったことは、リスク管理の重大さです。普段は銀行利用者として預金や貸出、利子率などの既に決定された表面的な結果しか見ておらず、それに至るまでの流れを考える機会がありませんでした。しかし今回、銀行業務を全体的に学習し、あらゆる業務における共通点としてリスク管理の徹底があることを改めて感じました。今後はこの経験をもとに銀行業務はもちろん、さらに「利

益とリスクのバランス」についても思考を深めていきたいです。

次に、最終プレゼンテーションです。「今後数年における欧州経済の予測」を行いました。これは事前課題としてテーマをいただいており、インターンシップ前に自分なりのストーリーを立てて準備をし、インターンシップ期間中にまとめあげて発表するという形でした。事前はかなり調べたつもりでしたが、準備の際に数値化できない予測部分をどのように論理立てて表現するのかというところにとっても苦戦しました。しかし、社員さん方がとても親切で分からない所を丁寧に教えてくださったので、しっかりと完成させることができました。そして、プレゼンテーション本番では学んだことをすべて出し切ることができました。

この2週間を終えて、改めて受け入れてくださったみずほ銀行デュッセルドルフ支店の社員の方々や同経会の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。このインターンシップでの講義やプレゼンテーションなどに対する知識や手法をはじめ、ドイツでの日常生活などの身近な部分までたくさんのお話をとても優しく教えていただいたことは一生の宝物です。この経験をふまえて、自分の夢に向かってより一層努力していきたいと思えます。

日本企業を通じ蘇州での社会人体験  
—日本コルマー株式会社にて—



周逸



8月18日から31日までの2週間、中国にある科瑪化粧品（蘇州）有限公司のインターンシップに参加しました。日本コルマー株式会社は中国に二つの工場を置き、化粧品の受託製造を行っています。私が今回の海外インターン

シップに参加を希望した理由は二つあります。一つ目の理由は、日本と繋がりのある会社に付きたいと思っているからです。もう一つの理由は、化粧品業界に興味があるからです。世界化粧品業界の年成長率は4%程度を保持しています。アジア市場の規模は世界の36.8%を占め、世界最大の化粧品消費市場となっています。その中、中国は年6%の成長率を維持し、2020年に化粧品市場規模は7兆円になる見込みです。中国市場において、日本と韓国の化粧品ブランドは15〜20%をシェアしています。そして、日韓のブランドの売り上げが年々上昇し続けるのに対し、欧米のブランドの売り上げが年々下落し続けています。これは近年日本系化粧品が中国で大変ブームとなっている事実からもわかります。日本化粧品受託製造業界における日本コルマー株式会社は、ナンパワンの市場シェアを占めていて、強い化粧品製造企業だと思いい、この度の海外インターンシップへの参加を決定しました。インターンシップのスケジュールについては志望動機に対応した充実したものであり、初日に、営業業務の説明とスケジュールの打ち合わせをして、私の要望に

対しスケジュールを細かく調整していただきました。インターンシップでは、主に営業業務内容と営業部を中心に、研究部、企画部、生産管理部と品質管理部の各部門間の協力、役割分担を学びました。営業部については、まず情報収集から出荷するまでの営業フローの説明を受けた後、営業部員の同行で市場調査を行いました。市場調査は蘇州中心で行い、欧米ブランド品は未だに市場の大半数を占めていることを知りました。また、来客対応と顧客訪問の同席の他、来られた顧客に同行し、生産ラインを回りました。顧客が商品生産途中に使用期限の印刷、容器の状態などの問題を重視しているとわかりました。営業部の現地スタッフをお得意先として自分が企画した商品売り出すという営業の疑似体験もできました。私は現地スタッフにUV乳液を紹介したあと、質問も受け、アドバイスを受けました。今回のインターンシップの機会はとても貴重で、普通の生活で体験できない中国における社会人体験ができ、とても有意義な時間を過ごすことができたと思います。今後の大学生活で、中国と日本とつながりのある学識を中心に勉強していきます。そして、この海外インターンシップという経験を生かして、将来日本と繋がりのある会社につきたいと思っています。



「第9回 同経会 大阪のつどい」が2019年11月6日（水）午後6時30分より、ホテルモントレ大阪で100名以上の方が出席して開催されました。司会は、朝日放送テレビの女性アナウンサー桂紗綾さん（平成20年同志社女子大卒）が務めました。

横井和彦同志社大学キリスト教文化センター所長・経済学部教授の祈祷に始まり、八田英二同志社総長・理事長からのご祝詞に続き、服部盛隆同経会会長が主催者を代表して挨拶を述べました。

来賓ご紹介の後、株式会社ダイフク代表取締役社長下代博氏（昭和58年卒）により、「社会インフラとして注目されるマテハンシステム」と題して記念講演会が行われました。下代氏は、同期で同じ伊藤ゼミで学んだ土橋純二郎同経会大阪プロジェクト委員長とご縁で、今回の講演をご快諾いただきました。

マテハンとは、マテリアル・ハンドリングの略で、機械による運搬や荷役作業のことです。日本初の乗用車専門工場にチェーンコンベヤシステムを納入、日本初の自動倉庫を開発、国産初のスチールベルトタイプの自動仕分け機を開発、世界初の非接触給電搬送システムを開発、というようにダイフクさんの歴史は日本初、世界初への挑戦の歴史と言えます。動画も交えながらわかりやすく事業紹介をしていただきました。

土橋純二郎 同経会大阪プロジェクト委員長



社是から名付けられた「日に新館（滋賀県）」にはマテハンの展示場として、国内外より毎年約2万名が来場されているようです。

小嶋淳司同経会名誉会長の乾杯のご発声により懇親会がスタートし、あちらこちらで名刺交換が行われ新たな交流が生まれました。

閉会に際しては、土橋純二郎同経会大阪プロジェクト委員長が御礼の挨拶を述べました。最後、岸田博同経会大阪プロジェクト執行理事のリードによるカレッジソングを全員が唱和し、第9回大阪のつどいは盛況のうちに終えることができました。

**講演要旨**… 皆様こんばんは、株式会社ダイフクの下代です。在学中は計量経済学の伊藤史朗先生のゼミで、今日ここにいられます同経会大阪プロジェクト委員長の土橋さんと一緒のご縁

でお声をかけていただき、喜んでお受けさせていただいた次第です。1983年に大福機工、今のダイフクに入社し、ずっと営業畑を歩んで、2018年4月に社長に就任いたしました。当社は1937年に大阪の西淀川で設立し、今年で82年目です。売上高約4600億円の内70%が海外です。従業員は約1万人ですが、これも約7割が外国人の従業員です。今、世界26の国と地域に海外支店、そして現地法人およびその事業所を展開し、生産拠点も主要な国で複数持っています。事業の国内の生産拠点は滋賀事業所に集中しており、13の工場があります。敷地面積が120万平米で、ゴルフ場18ホールに相当します。

滋賀事業所にある最大級のマテハンの展示場、「日に新館」には、毎年約2万人が訪れます。1994年オープン後25年間で約47万人の方がお越しになりました。海外からも年間約3千人から5千人の方が来られます。「日新 (Hihi Arata)」というのは我々の社是であり、今日の「われ」は昨日の「われ」にあらず、明日の「われ」は今日の「われ」とどまるべからず、ということ、日々進化していくという意味を表しています。「マテハン」というのは、マテリアル・ハンドリングの略称で、ものを扱い動かすという意味です。我々はそのための機械、ソフト、それを開発して製作しています。

例えば、工場には製品を生み出す機械があります。その機械には材料も原料も必要ですけど、それを持って行かなければなりません。そして、出来上がったものをどこかにまた運ばないといけません。そして、原料はいつでも買えるというわけではありませんので、蓄えておかなければならない。当然、保管する倉庫も必要。出来る上がった製品を保管する倉庫も必要。それらを可能な限り機械にさせよう、そしてそれを自動化させようと、ずっと取り組んできたのが我々の歴史です。

ダイフクが大きく成長していくのは、1957年米国のウェブ社と技術提携をし、

チェーンコンベヤシステムをトヨタ車体さんに納入したのが始まりです。その後1959年トヨタ自動車さんの元町工場にチェーンコンベヤシステムを納入しました。自動車の大量生産がスタートした年です。まさに日本の乗用車産業の幕開けでした。それ以降今日までトヨタさんをはじめ、日産さん、ホンダさん、スバルさん、マツダさん、スズキさん、すべての日本の自動車会社に納入しました。北米、ヨーロッパ、アジア、インド、中南米などにも一緒になって工場を建設し、稼働させてサポートするというところで、今日まで至っています。

その次に1963年、国産初のボウリングマシンを生産し納入しました。空前のボウリングブームで、受付から4時間待ちとかそういう時代でした。中山律子さんや須田佳代子さんと、美人ボウラーがもてはやされた時代です。滋賀事業所の広大な用地は、このときの利益で購入しました。滋賀事業所がなければ、今の我々はありません。そう考えますと、ボウリングブームがなければ我々がなかったのかもしれない。

1965年日本初の無人搬送車を開発しました。1966年松下電器さんの門真工場に、日本初の高層自動倉庫を納入しました。日本初が続きますが、我々は大変「初」というのが好きでして、やはり一番を狙うというのが社員のモ



株式会社ダイフク 代表取締役社長 下代博氏の講演



チバージョンも上がります。

1968年、このとき既に会社のスローガンが「無人への挑戦」でした。1969年日本初のコンピュータオンラインの自動倉庫を旭化成さんの延岡工場に納入、1973年日本初の冷凍自動倉庫を納入しました。

1982年には、フアナックさんに世界最先端の無人工場のシステムを納入しました。その当時、エリザベス女王が来日されたときに見学されたということでも話題になりました。

ダイフクの現在の6つの事業について紹介いたします。

一般製造業・流通業向けの事業では、スーパー、農協、生協、飲料、アパレル、化粧品などあらゆる業界に納めています。一番変わったところでは納骨堂です。東京の一見普通のビルの中に自動倉庫があり、その中にお骨が入っているということ。お参りに行きますと、前に位牌が出てきて、お骨が出てきて、その方のお経が流れるというものです。我々はいろんなものを運んだり保管したりしていますけれども、やらないものが2つあります。生きているものと死体ということ。ただ、これはお骨です。ですから大丈夫ということ。これはお骨です。Eコマースでは多くのネット通販会社から受注しています。日本は今、究極の人手不足です。この人手不足の時代に、人がいっぱい必要な産

業が伸びています。このアンマッチを解消するのが我々の物流システムです。Eコマース市場は2021年には全世界で約500兆円の市場になると予想され、これからまだまだEコマースの配送センターは世界中にできそうです。半導体・液晶生産ライン向けを扱っている事業では、世界の四大半導体メーカー、インテルさん、サムスンさん、SKハイニックスさん、そして台湾のTSMCさん、すべて我々が生産ラインを請け負っています。5G、データセンター、そして自動運転、これから世界で扱われるデータ量は爆発的に増えると言われていています。2013年に4400エクサバイト(=10<sup>18</sup>)が2020年は10倍になり、2025年にはその4倍になるようです。これは半導体の数を意味しています。したがって、これから世界で半導体がまだまだ増えるということ。

自動車業界というのは100年に1度の変革期と言われています。環境に配慮したプラグインハイブリッドとかEVが今盛んですが、これからライドシェアしていくという時代になり、どんどん変わっていきます。これらの変革に対し、我々もいろんな形でソリューションを提供していきます。

世界の航空旅客数は、2017年41億人から2037年には82億になるということ

です。世界中で今、空港が建設されており、そこでも我々は提案しています。空港というのは一見最先端の場所のように見えますが、我々からすれば未開の地です。そこに我々のノウハウを入れながら、もっと快適なものにしていく必要があります。食品工場や物流センターは汚い車では入ることはできません。また、インバウンドの増加でバスが増えています。バスは洗った後、大きな窓を拭くのが大変です。これも大きなプロワーで一瞬にして乾燥させるシステムを開発しています。

最後に電子機器事業です。産業パソコン業界では知られていますが、IoTの集中、ソーラーパネルの表示システム、医療機器技術内臓のコンピュータなどを多く作っています。世界のマテハンのランキングでは、お陰様で5年連続世界ナンバーワンを達成することができました。我々はこれからも産業界を支える黒子として、社会課題を解決する企業として、そして今後社会インフラとしてなくてはならないマテハンシステムを提供する企業として、社会に貢献していきたいと、そのような決意でございます。

ご静聴ありがとうございました。(了)

第18回「同経会東京の集い」は2019年11月27日(水)、東京・千代田区の日本プレスセンター10階で開催され、約60名の方が参加されました。第一部の講演会では浜 矩子氏(同志社大学経済学部大学院ビジネス研究科教授)により「急流か逆流か濁流か・グローバル経済の危うい明日」と題して講演をしていただきました。ご講演の要旨につきましては以下のとおりです。

①自国第一主義や移民・難民問題等に端を発し生じた、米中間の関税引き上げやハイテク競争、英国のEU離脱問題、ヨーロッパにおける民族主義の台頭など、今までに国際社会が築いてきた協調・協力体制の崩壊や離脱の諸問題。

②GigEconomy(インターネットで単発的な仕事を請け負う働き方)を典型とする、一見自由を感じるが、働く人の権利が労働法制等によって守られない非正規的な働き方が先進国中心に増加傾向にある。日本においても政府が主導する「働き方改革」の名のもとに、一層の生産性向上を目指し柔軟かつ効率的な働き方が求められるようになってきている一方、「世界の中で一番企業が活動しやすい国家を標榜する」アベノミクスの目論見が見え隠れする。

③Cashless化への国を挙げての促進により、カードやスマホによる支払いが急増している。利便性は向上するが、消費者の購買傾向や嗜好

といった情報が、関係業者によって集約され利用されるリスクが生じる。なんといっても現金を使わなくなると頭も使わなくなってしまうリスクも生じる。

以上、限られた講演時間の中で、3点について明快な分析・解説をご教示いただきました。また、随所にアホノミクス(ドアホノミクス?)へのくすぐりを交えながら、大変興味深い有意義なご講話でした。

第二部の懇親会では、同経会を代表し、岡田博邦同経会副会長(昭和46年卒)が開会の挨拶をされました。来賓の児玉正之同志社東京校友会会長(昭和45年卒)は2025年の同志社創立150周年に向けて、皆様の一層のご寄付をよろしくと話されたのち、高らかに乾杯のご発声をされました。その後、ご出席の皆様の間やかな語らいの中、中野滋様(昭和40年卒)のリードによる、恒例のカレッジソング・同志社チアアを行い、9時頃にお開きとなりました。



浜矩子氏 同志社大学大学院ビジネス研究科教授



# 第18回

## 卒業生のつどい

2019年11月27日 —東京—

文・東京プロジェクト副委員長 松谷 哲(昭和53年卒)



# 卒業生からの便り

個儻不羈



しまなみ信用金庫  
岡山勝太（八田英一ゼミ）

令和になって初めての卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。新社会人として、これから苦しいことや楽しいことを様々経験していくことと思います。私は、2002年4月に信用金庫のセントラルバンクである信金中央金庫に入庫し、2019年4月から縁あって広島



県三原市にある「しまなみ信用金庫」に業務出向しています。

信金中央金庫在籍中は、東京にある本部および仙台・秋田・名古屋といった各地を転々と、主に信用金庫の経営や業務に係るサポートを行ってきました。その間、プライベートでも結婚し、妻や3人の子供に恵まれました。ここまで読めば、順風満帆な社会人生活であるように見えるかも知れませんが、学生気分が抜けていなかった新入職員時代、初めて役職者となった営業店時代などよく上司や先輩に叱られていました。当時は、腹立たしく感じていたものの、今振り返ると反省すべき点が多々あり、成長の糧になっていくことも少なからずあります。

現在、信用金庫の現場で常勤役員の1人として、本部長を委嘱されていますが、金融機関を取り巻く環境は厳しく、日々難しい舵取りを迫られています。かつては、上司や先輩が大方の道筋を示してくれましたが、今は率先垂範して部下に道筋を示さなければなりません。責任重大ですが、非常にやりがいのある仕事ができ満足しています。昨今、金融業界の就職人気が低迷しているというニュースを目にする機会が

増えていますが、個人的には、決して消えることがなく、まだまだビジネスチャンスのある有望な業種であると感じています。今こそ新島襄先生の言葉である「個儻不羈」を体現する人材が1人でも多く、信用金庫業界に就職あるいは希望してもらえることを期待しています。



限界を決めずに挑戦する



農林中央金庫  
西窪優香（新関三希代ゼミ）



昨年、同経会賞を受賞でき大変光栄に思っています。卒業して1年が経ちましたが、同志社大学で過ごした4年間は思い出がたくさん詰まったかけがえない時間でした。

特にゼミ活動において、ディベート大会や日経STOCKリーグに参加し、新関先生の熱心なご指導のもとゼミの仲間たちと毎日朝から晩まで頭を悩ませ、一つの目標に向かって切磋琢磨したことは非常に貴重な経験であったと感じています。

現在、私は法人のお客様に対して融資を行う部署に所属しています。かつてない変革期に直

面している銀行業界において、単に融資を行うだけでなくお客様の様々なニーズを捉え、幅広いサービスで課題を解決することが重要となっています。

私はまだまだ未熟で現在はそういった業務に関わる機会は少ないですが、今後は大学生活で培った挑戦する姿勢を大切に日々精進し、限界を決めずに業務の幅を広げていきたいと考えています。

最後となりましたが、熱心にご指導していただきました先生方をはじめ、共に学んだ友人たち、お世話になった多くの皆さまに心より感謝申し上げます。

考え抜く力

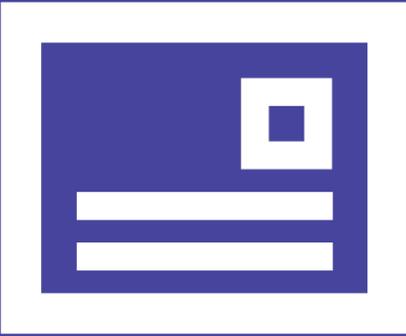


日本電気硝子株式会社  
曾我尚希（西岡幹雄ゼミ）

同経会賞をいただき、大変光栄に思います。熱心にご指導してくださった先生方をはじめ、お世話になった多くの方々へ心より感謝申し上げます。

卒業後、地元滋賀に本社を置き、グローバルに展開する特殊ガラスメーカーに入社しました。国内事業場にて半年間の現場実習、上海に

## 同経会賞受賞者からの便り





て3ヶ月間の海外研修を経て、現在は商事法務を担当しております。株主総会や取締役会など企業の骨格にあたるものを担うという日々緊張と責任を感じながら、仕事を進めていきます。これまでの研修や業務において実感したのは、考え抜く力の大切さです。同志社大学での4年間でこの力を培うことができたと思います。特にゼミにおいて西岡先生のご指導のもと、地域経済を様々な視点から毎日議論しました。絶対的な正解がない問題を考え抜いた経験は血となり肉となり、社会人になった私を支えています。今後も自ら学び、人と対話し、考え抜く姿勢を忘れずに精進していきたいと思えます。



社会における「正解」とは

株式会社アシスト

大谷優理子(小藤弘樹ゼミ)



昨年、名誉ある同経会賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。

在学中は小藤ゼミに所属しており、経済学のツールを用いて「物事を論理的、多面的に考える力」の向上に取り組みました。現在は企業活動を支えるソフトウェアの販売、導入に携わっています。今の業務で経済学の知識そのものを使用することはありませんが、物事の考え方や業務の進め方については、在学中に得た学びが大いに役立っていると感じています。

社会人になって痛感したことは、「絶対的な

正解はない」ということです。学生時代は、教えられたことをそのまま試験にぶつければ評価を得られましたが、実社会ではそうはいきません。教えられたことはあくまで「スタンダード」であって、目の前のお客様1人1人に合わせた臨機応変な対応が求められます。「スタンダード」を振りかざすのではなく、その場その場での最適解を目指して努力を続ける必要がある、ということを中心に留めて今後とも頑張っています。

周囲への感謝を忘れずに



ミネベアミツミ株式会社

宮浦万穂子(谷村智輝ゼミ)

卒業してから早いもので1年が経ちます。大学4年間で振り返ると、非常に恵まれた環境で勉学に励むことができたこと改めて感じています。

いつも熱心にご指導下さる谷村教授をはじめ、自分には無い知識・個性を持つゼミの仲間や友人のお陰で、沢山の刺激を受けました。

そして卒業の際光栄なことに同経会賞を頂き、改めてそういった周囲の方への感謝の気持ちで一杯になったのを覚えております。

私は現在、ベアリングなどの加工部品や、電子機器等をグローバルに展開する企業で勤務し



ています。

具体的には、営業事務としてお客様とのやりとりや、確実に製品を納めるべく納期管理・調整等を担当しています。

まだまだ未熟ではありますが徐々に色々なことを任せて頂いており、責任とやりがいを感じています。

これからも様々なことに関心を持って吸収する姿勢を忘れずに、成長していきたいと考えています。

## 2020年度 同経会スケジュール

5月30日	同経会理事会
6月6日	卒業生のつどい 名古屋
7月11日	同経会総会
7月11日	卒業生のつどい 京都
8月~9月	海外インターンシップ派遣
10月~11月	卒業生のつどい 大阪
10月~11月	卒業生のつどい 東京
2月	しめた会
3月21日	同経会賞 授与式



同経会報 第85号  
発刊記念  
特別インタビュー

学校法人同志社 総長・理事長  
同経会 顧問

# 八田英二

## 高度経済成長期に経済学を学ぶ

1967年、高度経済成長の最中に本学に入学しました。

昨年は国内出生数が90万人を切ったと報じられました。私が生まれた当時は約270万人。いわゆる団塊世代です。また、4年制大学の進学率は、20%にも満たない数字で、今のように大学進学が大衆化されていない時代でした。

その頃は、高度経済成長というので、同志社高校生では何と言っても経済学部が一番人気が高く、次いで商学部や法学部。次の時代を自分たちが担うんだと、意気揚々と大学に入学しました。

ところが、一番勉強しなくてはならない3年次生の時です。大学紛争で校内がバリケード封鎖、ゼミ以外の授業がすべて休講になってしまいい、市内のあちこちの寺院を借りて、ゼミが開講されました。今振り返ると、1年間、授業を受けられなかった代わりに、少人数制のゼミを通して、学友たちとの心の絆を深めることができたことは良かったと思います。

その後の就職活動では、いくつかの企業から内定をもらい、上級国家公務員試験にも受かりましたが、私の実家は和装関係の仕事をやっていたので、会社員になるメリットがあまりなく、

公務員になるのも気が乗らなかった。それより経済学の勉強に興味をおぼえ、恩師の先生の強い勧めもあって、卒業後は大学院に進学することに決めました。修士課程2年間、博士課程1年を終えた後は、経済学部の助手として働きながら、さらに研究を進めていきました。

## これからの時代はアメリカに学べ

助手になったばかりの頃、指導教授の伊藤先生が私にこう言いました。「八田君、これからの時代は経済学を学ばならアメリカだ。ぜひ留学するべきだ」。恩師のこの言葉をきっかけに、私はアメリカに渡ることを決意しました。UCLA、UCバークレー、ウィスコンシンの3つの大学院すべてに合格。その中で、ミクロ経済学の応用分野である産業組織論で有名なベイン先生の下で学びたいと、カリフォルニア大学バークレーの大学院に進むことに決めました。世界一の経済大国アメリカで、最先端の学問分野を直に学べる。そう考えると、心が奮い立ちました。

## 多様な経験が人間の土台をつくる

もちろん、授業は全て英語です。私は高校から大学まで、ESS (English Speaking Society) に入っていたので、他の人よりは英語を勉強していたつもりでしたが、や

はり本場の英語には歯が立ちません。語学学習は、ネイティブと話して聞き取れる耳を作らなないとダメだと痛感しました。とはいえ、経済学用語はあらかじめ知っていたので、先生の言うことは理解できましたし、英語に関してひどく苦労したということはありませんでした。

若く多感な時期に通ったESSというサークル活動は、私にとって、大学院やアメリカでの授業と同じように、精神の土台となる部分を作ってくれたかけがえのない場所の一つです。その時代の友人たちとは、今も付き合いが継続しています。

新島襄は「学術技芸の知識」「人間性の涵養」の両立に重きを置きましたが、学生時代には机上の学問以外に、誰と付き合い、何を読み、どこに住んで何を食べたかという経験すべてが、人格を形成するのに非常に大事なものであるということを私自身が身を以て実感しました。

## 競争社会に刺激を受けて

アメリカの大学院は、1年目で必修科目、2年目から博士論文の構想、準備に入り、3年目で博士論文審査というカリキュラムです。向こうの学生は、日本の学生と違って、非常によく勉強をします。日本では、かつては文系の博士号は名を遂げた後に取るものですが、アメリカでは、持っていないと教員の仕事に就け



ない教員免許のようなもので、なんとか取ろうと、学生たちは一所懸命勉強するのです。

助手の職にあるため、留学できる期間は3年と決まっております、その間に博士号を取らなくてはいけなかったもので、毎日夜遅くまで勉強に勤しみました。アメリカの厳しい競争社会に身を置きながら、人生でいちばん勉強した時期だったと思います。

その甲斐があつて、滞在3年目に無事、博士号を取得することができました。一所懸命に勉学に励んだ、その時の心の温もりが、自分の中に今もまだ生きていけると感じます。

### 学長主導で大学改革を遂行

1977年春、日本に帰国。教員としてのキャリアをスタートしました。

教員になった頃は、学生とは兄弟のような年齢差で、その後は徐々に、親子、孫ぐらいの差となりましたが、現場を疎かにしたくないという持論に従い、学長に就任してからも、ゼミと大学院の授業を担当、生涯現役のつもりで教え続けました。

振り返れば81年にゼミの第1期生が卒業してから、去年で第39期生が卒業するまで、869名が私のもとから巣立ったことになりました。私は現在70歳。まさに経済学部で尽くした人生と言えます。

98年、学長に就任。まず取り組んだのが、変わりつつある社会情勢に対応し、学びの多様性を持たせるため、6つの学部から最終的に8学部増やし、14学部に拡張したこと。立命館大学が理系や情報、国際関連学部に入れているので、そちらと差別化するために、教養情報、人間、健康、グローバル化に重点を置く学部を打ち出しました。

また1〜4年生が同じ校地で学べるようにするため、「上京区の活性化に寄与したい」と門川市長に提案して、もと染織試験場だった建物跡地を京都市から譲り受けて新しいキャンパスを開設しました。その後、付属の小学校を二つ、そして法律やビジネスを学べる大学院も新設し、新島襄の建学の精神に基づいた上で、学びの場を拡大していきました。

### 変えていくべきものと、守り抜くもの

「どこからそんな思い切った発想が出てくるのか」と聞かれることがあります。

「長年の経験から」としか答えようがありませんが、学長の職に身を置いていると、世界の教育事情についての情報が入ってくるとともに、他の業界との競争意識も出てきます。この厳しい大学間競争の中で、同じことを続けていても低迷していくだけです。時流を読み、周りの成長に合わせて新機軸を打ち出していくこと

が不可欠だと考えています。

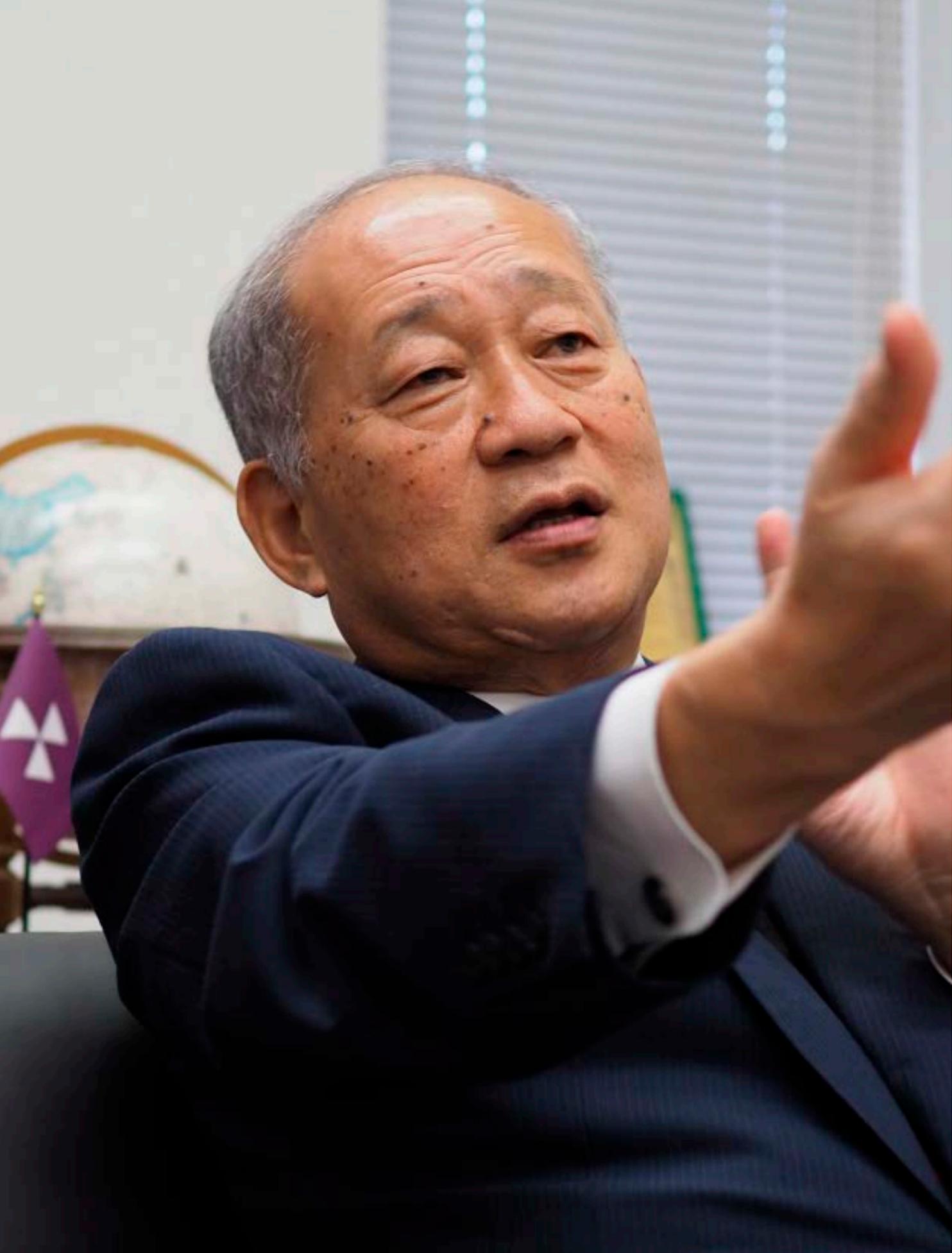
ただし、学問や学生に対する付加価値という部分はほとんど変えていく一方で、創立者である新島襄の建学の精神は、時代が変わっても決して変えてはいけぬものであると確信しています。

これからも、学問だけではなく、様々な人や場所と出会い、経験を深めることで人間性を陶冶することができるといった機会を学校が与え、サポートしていきたいと思っております。

### 同経会会員へのメッセージ

自身の経験から言えることは、20代から30代ぐらいまでの間にした努力は決して無駄にならないということ。それが失敗であれ、若い頃の挑戦は、自分の血肉になり、将来必ず役に立ちます。22歳で出来上がってしまつて普通のレールの上を走るのではなく、30歳ぐらいまでは、自分で道を切り開くつもりで挑戦することが大事です。

同志社大学経済学部という共通の土壌、学風のもと、仲間とともに学んだという経験は本当に貴重なもので、皆さんの精神面での大きなアイデンティティ、そして原点となるに違いないと思います。



81年にゼミ1期生卒業以来、去年の39期生まで、自ら教鞭をとる“現場主義”を徹底  
869名の教え子を巣立たせた



平成2年卒業

# 卒業生インタビュー

振付家・ダンサー

# 砂連尾理

## 男子一人のダンススタジオにて

私が高校生の頃は、受験戦争が熾烈な時代でした。そういう風潮に疲れていた私は「いい大学からいい会社」という一般的な流れに乗るのではなく「自分が本当にやりたい道にすすみたい」と、常に考えていました。

同志社大学経済学部に入學した直後のことです。ちょっと違ったことをやってみようと思いい、一念発起してダンスを始めました。全く縁遠い世界でしたが、その頃、アーティストのミュージックビデオを放映する「MTV」が流行り出したり、マイケル・ジャクソンの「スリラー」映画「フラッシュダンス」が大ヒットしていた影響もあったのでしよう。

ただ当時は、今のようには多様なジャンルのダンスがあったわけではなく、バレエやジャズダンスなどがメインで、通っているのは若い女性が多かった。スタジオの生徒のうち、私が受講していたクラスでは男子は私ひとりだけでした。

## 錦市場でアルバイト、渡航費を工面

4回生まではダンスに明け暮れました。ただ、このまま卒業するには後ろ髪を引かれました。で、親と先生に「もう1年行かせてください」と懇願、留年を決断したのです。親は「ようや

く『堅気の道』を進んでくれるかな」と安心してたようでしたが、友人から「映画サークルのダンスシーンを手伝ってほしい」と頼まれ、再びダンスの世界へ舞い戻ってしまいました。更にもう1年留年し、その1年間は、錦市場の魚屋でアルバイトをしながら渡航費を貯め、忘れもない1990年、ニューヨークへ飛び立ちました。

## 神様からのメッセージ?!

ニューヨークでの留学生活は、甘くはありませんでした。友達が「多く貯めなくても現地でもアルバイトを見つければ大丈夫だ」と言うのを真に受け、最小限の所持金しか持参しなかったからです。

皿洗いのバイトぐらいはありましたが、給料は微々たるもの。安いかからフルーツばかり食べていたらお腹を壊してしまい、心身共に衰弱。初めは意気揚々とアメリカにきたものの、どんどん気持ちが萎えていきました。「もう限界だ……」そう思った私の足は、日本への帰りの航空チケットを求めに、自然と航空会社のオフィスに向かっています。刀折れ矢尽き、夢を諦めて帰国の途につこうとしたのです。

しかし、オフィスのドアはいくら押しても開きません。「しまった。今日は休日だったのか」徒労感で再び落ち込みましたが、ふとある考え

がよぎりました。「もしかして神様が『帰るな』と言っているのかもしれない。もう少しだけ頑張ってみるか」不思議なことに、その日から突然、いいアルバイトや下宿が見つかったりして、生活がリズムよく回り始めるようになりました。

それ以降のダンス修行は一気に楽しくなりました。また、学生割引料金でレッスンを受けたったり、ブロードウェイのミュージカルや、メトロポリタンオペラ、ダウンタウンでは前衛的なダンスやモダンダンスなど、良質で実験的な舞台をたくさん観ることができました。「明日はどんなのが観れるだろう、どんなレッスンを受けられるだろう」と、日々わくわくしてニューヨーク留学を満喫できたのです。

新島襄先生もいろいろな困難を奇跡的に乗り越え、アメリカでじつにさまざまな貴重な経験を積み重ねました。私の場合も同様に、うまくいかない状況が転機となり、目の前が開けるといったことがよく起こります。「あの時、日本に帰れなくてよかった」と心から思っています。

## アーティスト生命の危機

アメリカでの2年間の留学生活に加え、2000年を境に京都芸術センターの開校やNPO組織のコンテンポラリーダンスの支援体制が整ったおかげもあり、37歳の時



「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて「次代を担う振付家賞」オーディエンス賞」を受賞しました。「経済活動に飲み込まれないために」とアートの世界に入ったのですが、賞をとったからといって、そう自由にやれるわけでもなく、毎年新作を作らないと助成金がもらえないなど、大変なことが数多くありました。

なかでも創作アイデアの枯渇には泣かされました。アーティストなら誰でも直面することはいえ、アーティスト生命にかかわる問題です。「このままではダメだ、あらたな創作にはもっとインプットをする充電期間が必要だ」と思い、長年のダンスパートナーである寺田みさこさんに「一旦休止したい」という旨を伝えました。人生の転機には海外に出る、というのが私のポリシー。なんのツテもないにもかかわらず、その頃アートシーンで一番ホットだと言われていた、ドイツの首都ベルリンに行こうと手続きをすすめ始めました。

### 紆余曲折を経て、ベルリンへ

そんな熱意とは裏腹に、肝心の受け入れ先がなかなか決まりません。次第に焦ってきました。「もうドイツへ行くことは叶わないのだろうか。日本でこれだけ頑張ってきたのに…」  
歯がゆい思いとはまさにこのこと。万事休す

という言葉が頭によぎりはじめた頃、ベルリンで開催された「ジャパンノウ」というイベントで、私たちのカンパニーの舞台を上演する機会に恵まれました。現地のイベント主催者に相談すると「良かったら紹介させてくれ」とありがたいとも言ってくださったのです。そしてようやく、文化庁の研修員として、晴れてベルリン行きの切符を手にしたのでした。

コンテンツポラリリーダンスのリサーチ、という名目での1年間の滞在でしたが、当地でクリエイションの依頼を受けたり、色々なクリエイション現場に参加できたりなど、新たな出会いがたくさんあり、充電期間のつもりが、思いがけず動きのある鮮やかな1年となりました。

特に、障がい者劇団「シアターティクバ」とのワークショップ、コラボレーションはとてもダイープな体験でした。シアターティクバは、もともと障がい者支援から始まった団体で、政府から資金を得て、障がい者による演劇やダンス、美術などの表現を支援する活動をしています。独自の大きな劇場やアトリエも所有しており、団員の中には給料を得て自活している人たちまでいます。日本と違い、そうした活動が社会に認められていることに目から鱗が落ちる思いがしました。

### 社会的弱者との活動へ

ベルリン滞在中、一番熱心に取り組んだトレーニングが日本から続けていた「合気道」でした。ヨーロッパでは非常に盛んであり、私が通っていた道場は日本人以上に基本に忠実に稽古に励んでいました。この稽古により、合気道がもつ人間の動作の本質的な部分をダンスに取り入れることができました。

ところで、ドイツ人は気質が我々日本人に近いか話しやすく、ベルリンは私にとって非常に居心地がよい街でした。とはいえ、海外ですから、言葉が自由に通じないという障壁に常に直面します。そう思うと、どんな人でも、周りの環境が変われば「障がい者」になりうるということを、身を以て知りました。

この体験が、のちに私が障がい者や老人などの社会的弱者と言われる人たちに目を向け、共に踊る試みを始めた原点になりました。いま振り返ってみると、同志社入学時から、あちこち回り道をして、ほうぼうに頭をぶつけながらも「自分が本当にやりたかった道が見つかった」のかもしれない。まさに「障害物」だらけのダンス人生でした。けれど、その経験が逆にどんな時も「自分のペースで、焦らず落ち着いてやっていこう」と思える土台を作るのに役立つのではないかと思うのです。



人生の転機には海外に出る、のがポリシー。  
なんのツテもないにもかかわらず、ベルリンを目指したと語る、砂連尾さん。

## 師や友人との出会いが人生の原点

今出川キャンパスは、レンガ作りの壁が美しく、クラーク館など、歩くとときしむ木の階段や講義室も趣があつて、隣接している京都御所では、空き時間にのんびり昼寝した思い出があります。

担当教官だった経済学部 馬場浩也教授には、気にかけていただいたり励ましていただいたりして、非常にお世話になりました。先生の一つひとつの言葉が、苦しい時期の支えになつていたと、心から感謝しています。

また、京都には、古い伝統を大事にすると同じ時に、新しいものを積極的に取り入れていく文化があります。晩年をどこで過ごそうかと思案すると、すぐに京都が思い浮かぶほど、私にとって愛着がある街です。芸術にも寛容なこの街で、自由な精神を重んじ、誰に対しても平等に接する校風をもつ同志社大学を卒業でき本当に良かったと思っています。

この大学で学ぶ皆さんも今後、素晴らしい人々と一人でも多く出会って、何事にもひるまずチャレンジする気持ちを忘れず、自分の世界を広げてほしいと願っています。

(文責・広報委員会)

## 退任の先生からのご挨拶



布留川 正博

ついにこの時がやってまいりました。今まで退職される先生方の姿を見てまいりましたが、自分にはまだ遠いことに感じていました。同志社大学に入社させていただいたのが1990年、それから30年間はあつという間に過ぎ去つたような気がします。それでも記憶に残る様々な事柄が走馬灯のように駆けめぐります。そのなかでも印象深い事柄を3点紹介したいと思います。

1つ目は、入社して数年後に行かせていただいた在外研究です。私は自分の研究内容に近い研究をされている先生 (James Walvin) が

おられるイギリスのヨーク大学を選びました。ウォルヴィン先生は、近代奴隷制、大西洋奴隷貿易の大家で、そのころ毎年1、2冊ずつ自身の本を出版されていきました。お会いしてすぐにヨークの町を案内していただきました。ヨークは古い町で、ミンスターや城壁で有名な、瀟洒で住みやすいところでした。家族も一緒に生活していましたので、多くの知り合い、友人たちに恵まれました。ウーズ川の畔にアパートを借り、時々内外の友人たちを招き、パーティーを開きました。今思い起こしても楽しい、充実したひとときでした。

2つ目は、すでに退職されている横山先生が学部長のときに行われたカリキュラム改革です。教職員が総出で、毎週のように会議を開き、侃々諤々の議論が行われました。導入科目をどうするのか、外国語科目や情報科目の位置づけ、基幹科目や展開科目の内容、そして最終的にどのような学生を育て、社会に輩出していくのか、それぞれの立場から様々な意見が出されました。私は教務主任の立場からそれらを取りまとめなければならなかったのですが、まだまだ新米でしたので、うまくいかなかったこと

砂連尾理 (じゃれお・おさむ) ダンサー・振付家  
立教大学 現代心理学部映像身体学科 特任教授。  
1965年大阪生まれ。1990年同志社大学経済学部卒業。  
1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。1990  
〜94年、ニューヨークにダンス留学。2002年「TOYOTA  
CHOREOGRAPHY AWARD 2002」1st、「次代を担う  
振付家賞 (グランプリ)」、「オーディエンス賞」を受賞。受  
賞作を海外10ヶ国12都市にて公演。2004年京都市芸術文  
化特別奨励者。2008年度文化庁・在外研修員として、ド  
イツ・ベルリンに1年滞在。近年の作品に、「ドイツの障がい  
者劇団テイクバとの「Thikwa+Junkan Project」、舞鶴のお  
年寄り達との「じつじつダンス」、また病、障害などをへ生き  
る過程にある変容」と捉え、対話を通してダンスへと変換す  
る「変身ーええ、私です。又あなたです。」などがある。著書  
に「老人ホームで生まれた〈じつじつダンス〉ーダンスのよ  
うな、介護のよつな」(晶文社)。  
HP: <https://www.jareo-osamu.com/>

も多々あったように思います。それでも結果的には、大学のなかでは先進的なカリキュラムができたように思います。

3つ目は、2013年に同志社社史資料センターの所長になったことです。綾瀬はるかさん主演のNHK大河「八重の桜」が放映された年です。東京、福島、京都をはじめ各地で新島(山本)八重さんおよび新島襄先生関連の展覧会が開かれ、所長の立場で出向きました。印象深かったのは福島県内で行われた展覧会でした。地元の学芸員や関係者と交流するなかで、福島県人の懐の深さや優しさに感じ入りました。おいしい地酒や名物の馬刺しもいただきました。

この30年間を振り返りますと、様々な方々にお世話になってきた、という一言に尽きます。経済学部の教員の皆様および他学部の教員の方々にお世話になりました。頼りになる職員の皆様にもお世話になりました。また、父母会の皆様にもお世話をいただきました。そして何より学生たちにお世話になりました。教員は学生に育てられるものです。すべての皆様方に感謝申し上げます。

最後に、私の研究生活の集大成となる拙著『奴隷船の世界史』を岩波新書として最終年度に出版できたことは望外の幸せでした。これまでの経験を生かしてネクスト・ステージに進みたいと思っています。ありがとうございました。

大学と経済学部のひろば

# 現役の学生が語る「わがゼミ」



## ■荒渡良ゼミ

文・武内 颯希

私たち荒渡ゼミは24名のゼミ生が所属しておりマクロ経済の視点から様々なモデルや数式を学びながら現代の経済的事象についてメカニズムや要因の分析を行っています。具体的な活動内容としては二神孝一・堀敬一著『マクロ経済学』を輪読しその内容について自分達で資料を作成し解説を行っています。さらに解説内容に関連する経済問題について解決策や将来像を議論することで単にマクロ経済学を学ぶだけでなく物事に対する思考力や表現力を培っております。また卒業研究に対する取り組みも始めており現在は研究テーマに関するレポートを作成しております。



## ■船橋恒裕ゼミ

文・木暮朱音

私たち船橋ゼミは福祉経済をテーマに研究を行っています。今年度は出生率の低下や社会保障費の増加など、少子高齢化に伴って生じる問題を学びました。春学期にはゼミ内でディベートを行い、教育費の無償化等について討論をしました。討論を重ねる中で諸問題に対する自らの立場や考え方が磨かれ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。秋学期には各々の関心があるテーマに関する発表を行いました。北欧と日本の社会福祉の比較からふるさと納税、キャッシュレス、老後に向けた資産運用、介護ロボットまで多岐にわたるテーマの発表が行われました。

ゼミ生一人一人の個性あふれる新鮮な内容に刺激を受けるとともに、将来を背負って立つ私たち世代の可能性とその根幹を目にすることができた気がします。来年度は論文執筆に向け船橋先生のご指導の下、一層励んで参ります。



## ■伊多波良雄ゼミ

文・渡辺智帆

こんにちは。伊多波ゼミ33期生です。私たちは、公共経済学をテーマに現在26名で学んでいます。2回生の時には、「財政破綻後」を教科書として、債務超過の日本の財政は今後どうなっていくのかについて学びました。また、並行して自主的な活動として、地域間格差についても調べました。旅行もかねて東京の多摩市までゼミのみんなで足を運び、市の職員の方から話を伺うなどをした経験は、楽しい思い出です。3回生では、ディベート大会・論文大会に出場しました。このディベート大会では、「レジ袋は廃止すべきか」などのテーマで戦い、伊多波ゼミは4勝1敗と健闘しました。論文大会では、東京と大阪にチームで別れ出場しました。夏休みも集まって論文執筆を行ったのですが、結果は残念でした。悔しいので、後輩の方には賞を取ってほしいと思います。写真は、6月に先生の誕生日をお祝いさせていただいた時のものです。みんなでケーキを頂きました。



## ■北川雅章ゼミ

文・水久保太一

アラームが鳴るより早く目が覚めた。私にしてはこんなことも珍しい。今日はディベート大会。前日までチームのメンバーと散々準備をしてきた。あとは全力で挑むだけ。会場に着き試合の準備をする。緊張感が増す。全てが終了し、本戦出場チームの発表の時間。北川ゼミの名前が呼ばれる。結果は、全チーム予選敗退。MVP賞でやっと北川ゼミのチームが呼ばれた。悔しさを覚えながらも、私は北川ゼミらしいなと思わず少し笑みが溢れた。少し変わった始まり方をしてしまいましたが、北川ゼミはどんなゼミかと聞かれれば、私はとことん自由で笑顔溢れるゼミだと答えます。北川ゼミは部活動、サークル、趣味、アルバイトなどに一生懸命打ち込む学生がほとんどです。ディベート大会では他のことと両立しながらの準備がMVPとして評価されたのだと思います。私たちはゼミ内でやることを自分たちで決めます。2回生に向けた説明会や授業内の発表、先輩方との懇談会など、幅広く活動してきました。自ら考え行動する、とことん自由なゼミ。決して立派な結果を残しているわけではないが、充実しているみんなが笑顔なゼミ。私はそんな北川ゼミが大好きです。



## ■小橋晶ゼミ

文・竹内雄貴

私たち小橋ゼミは、現在、2回生17名、3回生20名、4回生14名で活動しています。2019年度、3回生はミクロ経済学に関してのエッセイ作成、教科書作成、また、ビジネスアイデアコンテスト、ディベート大会などに取り組みました。活動内容はゼミ生で話し合ってから決まりました。どの活動もグループで活動することが多く、主体的に協力しあって取り組めたと思います。2回生が新たに入ってから、週に1回は2、3回生合同でゼミを行っています。そこでは、日経新聞を使って、実際の経済ニュースをミクロ経済学を使って議論し、発表したりしていました。その他、授業以外では小橋先生と一緒に滋賀で合宿をしたり、飲み会をしたりと親睦も深めています。自分たちで考え、積極的に行動を起こしていくことを私たち小橋ゼミは大切にしています。今後も自主性を大切に、充実したゼミ活動をしていけるようにしたいと思います。



### 小林千春ゼミ

文・南川 瑞紀

私達3年生は、約1年半の活動の中で沢山の経験をしてきました。2年生の秋に出場したキャンパスベンチャーグランプリ大阪では、2チームがセミファイナルで発表を行いプレゼン力や多角的な視点を養いました。3年生の春には、パナソニック様に協賛を頂いた経済学部・経済学会主催のビジネスプランコンテストに出場しました。4チームが書類通過しましたが、ファイナルでは結果を残せず、皆で悔し涙を流しました。その悔しさをばねに出場したデイバート大会では、優勝を目標にチーム間を超えた連携プレーを行う等、ゼミ一丸となり活動に力を注ぎました。結果、優勝を果たし5連覇を達成しました。上記のどの活動もかけがえのない経験だと感じています。ゼミではデータを用的経済分析にも取り組んでおり、竹廣ゼミとの論文発表会や卒業研究に活かします。これからも温かく見守って下さる小林先生、先輩方に感謝の気持ちを忘れず、残りのゼミ活動に励みます。



### 小藤弘樹ゼミ

文・西嶋 周磨

私達小藤ゼミは、新たに2年生11名を加えた総勢18名で活動しています。2年次の秋学期から3年時の秋学期にかけて、数冊の教科書を選択し輪読しています。今年度の2年生は西村和雄・八木尚志著「経済学ベーシックゼミナール」、3年生は山崎福寿著「日本の都市のなにか問題か」を輪読しました。

また、11月には法政大学経営学部の福島ゼミと合同ゼミを行いました。春から合同ゼミに向けた準備に取り組み始め、論文の執筆やプレゼンテーション用のスライドを作成したりしました。異なる学部同士で発表することで、普段とは別の視点からの意見や、専門分野外の知識を得ることができました。4年次には、この合同ゼミの経験を活かして卒業論文を執筆します。小藤ゼミでは



上級生が下級生のゼミに参加するなど、学年の垣根を越えて活動しています。教科書の内容をただ学ぶだけでなく、時事問題に当てはめて考えたり、幅広い話題について活発な議論を行ったりと、有意義な活動をしています。

### 久保徳次郎ゼミ

文・藤原もえ

私達久保ゼミでは、新たに21名の学生を迎えて国際金融をテーマに活動を行っています。私が在籍した2年次秋学期の活動では、テキストとExcelソフトを用いてポートフォリオの期待リターンやリスク、収益率のランダム性などの導出について学びました。ゼミ生が集めた株式の銘柄を用いて検証したところ、ランダムな結果に基づくことからモデルでは説明が付きにくいこと、またExcelソフトの汎用性の高さに驚くこと盛り沢山でした。学期末には、テキストに記されている一般理論や解釈について久保先生の見解を交えながら、株式と債券をテーマに各自がレポートの執筆に取り組みしました。

他にも大阪証券取引所を訪問したり、ゼミ生でご飯会を開いたりするなど意外とアクティブな一面もあります。それでもまだまだ交流が深いとは言えないので、今後とも回生を問わずに親睦を深められる機会がありました。是非お願いしたく存じます。

今はまだがむしゃらに知識を深める日々ではありますが、私達たちの未熟さを痛感しつつも、仲間と共にゼミ活動に努めていきたいです。



### 茂見岳志ゼミ

文・藤畑 比奈子

私達茂見ゼミは「メカニズムデザイン」について日々学んでいます。2年次では、既存の多数決を疑い、全員誘因を損なうことなく実現できる最適な多数決の制度はどのようにして作ることが出来るのか。多数決は本当に正しい決め方なのか。教科書を熟読し、個人で章ごとに解説を発表していました。3年次では、2年次の発展的な内容の発表に加えて、ゼミ内でチームを作成し、ビジネスプランコンテストとデイバート大会に出場しました。企業（今年度はPanasonic）と経済学部が連携したビジネスプランコンテストでは、3チームが決勝に進み、結果優勝することができました。また、デイバート大会でも1チームが決勝進出を果たすことが出来ました。ゼミ外でも大会後の打ち上げや、お花見など縦横の繋がりを大切に活動しています。日々個性豊かなメンバーと切磋琢磨し、これまでのゼミでの経験を活かしてこれからの卒業論文、就職活動に活かしていきたいと思っております。



### 宮崎耕ゼミ

文・馬服 美季

先輩方がお過ごしでしょうか。「良心会」（宮崎ゼミOB・OG会）ではゼミ活動へのご支援をいただきまして、ありがとうございます。

現役生は23期生を加えた79名です。2回生はUX（ユーザ体験）を重視したウェブサイトの設計・制作、3回生はオープンデータとAIを活用したアプリケーション開発、4回生はAI社会などをテーマとする卒業論文の執筆に取り組んでいます。また、3回生は大学の「ビジネスアイデアコンテスト」で準優勝、4回生はアプリ開発の国際コンテスト「第2回東京公共交通オープンデータチャレンジ」で特別賞を2本受賞という快挙を成し遂げました。夏合宿ではシリコンバレーを訪れ、グーグル、アップルの本社やスタンフォード大学、コンピュータ博物館などを視察しました。

2020年度は宮崎ゼミ開講25周年の記念良心会（東京で開催予定）が企画されています。是非ご参加ください。先輩方の益々のご活躍をゼミ生一同心からお祈り申し上げます。



### 宮澤和俊ゼミ

文・山邊大暉

私達宮澤ゼミ3年生は、男子5人、女子5人、宮澤先生1人の計11人と少人数で活動しています。普段の授業では公共経済学に関する教科書の輪読、Excelの回帰分析を使用し、実証分析をしています。また普段の授業以外では、関西学院大学の田畑ゼミ、同志社大学の四谷ゼミとの合同デイバート大会や、同志社大学内の学生プロジェクトに参加しています。デイバート大会では、「ベリシックインカム」の導入の是非、学生プロジェクトでは、「京都市営バスの運営赤字の解決策」という課題のもと、ゼミ生10人で1つの方向を目指し、役割分担をして一丸となって取り組みました。夏休みにはゼミ合宿として、学生プロジェクトの実地調査やそれを元にした議論を行い、最終日には観光に行くなど、メリハリをつけながら、みんなで楽しい時間を過ごすことができました。このように宮澤ゼミは、少人数だからこそその関係性を活かして、ゼミ活動を通して、全員で課題に向き合い、成長していくことを目指しています。



### ■新関三希代ゼミ

文・吉野 航佑

私たちは新関三希代先生のご指導の下、大阪大学・関西学院大学との三大学合同ディベート大会と日経STOCKリーグの2つの活動を行いました。

三大学合同ディベート大会では「残業上限規制の是非」「定年延長の是非」「社外取締役の是非」というテーマで行い、本年度も全チームが勝利を収めました。

日経STOCKリーグでは、約半年間かけて論文作成を行いました。昨年度の第19回大会において、総勢1792チームの中で大学部門の優秀賞を頂きました。本年度の論文作成の過程では、法政大学とのインターゼミナールを開催し、意見交換をすることで論文に更なる磨きをかけることができました。

また、東京で開催された新関ゼミOB・OG会に参加させて頂き、社会で活躍される沢山の先輩方と有意義な時間を過ごさせて頂きました。これからも20年を超えるゼミを支えてくださるOB・OGの方々、何より新関先生に感謝しながら、ゼミ活動に全力で取り組んで参ります。



### ■西村卓ゼミ

文・藤原 春菜

西村ゼミは京都の職人や街について研究しています。具体的にはゼミを5つの班に分け、各班がフィールドワークを通して京都の伝統文化の継承方法や地域活性化の課題について学んでいます。そしてそれらを自分たちの考察を交えながら他班に発表しています。私の班では「西陣織」について研究しています。30年前は非常に栄えていた「西陣織」ですが、バブル崩壊以降年々衰退し、現在は厳しい状況にあります。それでも次世代へ継承していくために、現代ファッションとコラボし「新たな西陣織」を生み出している方がいます。私たちはそのような方々に密着取材を行うことで「21世紀型のモノづくりの在り方」について日々学んでいます。また「カミング」という上京区の情報サイトで佐々木能衣装さんの記事を書かしていただくなど、ゼミ内発表以外の活動にも精力的に取り組んでいます。これらの班活動以外にも、ソフトボール大会やビザパーティーなどゼミ生全員の仲を深めるイベントにも力を入れていきます。



### ■西岡幹雄ゼミ

文・藤原 春菜

私たちは西岡先生のご指導の下、「地域の経済と思想」をテーマとし、グループで研究を進めてまいりました。今年度は、京都や和歌山、大阪などの関西圏を中心に、同郷者が多いことから福岡地域をテーマとするグループもあり、ゼミとして多様な地域の研究に取り組むことが出来ました。

研究の成果を発信する場として、今年度も他大学との交流会が二度設けられました。参加校は本学を含め六大学（奈良女子大学・関西学院大学・南山大学・大阪府立大学・大阪経済大学）で、交流を深め議論を交し、多様な視点を取り入れることで、研究に磨きをかける良い機会となりました。

グローバル化の進む現代社会において、「地域」という社会の最小単位で様々な地域の経済に触れ研究を進めております。今年度のゼミにおける研究・学習は、現代社会に対応し得る多様な視点で経済を俯瞰することに繋がります。ゼミ生の糧となる学びとなりました。



### ■落合仁司ゼミ

文・天羽 璃乃

私たち落合ゼミでは「行動経済学・制度経済学」を勉強しています。2、3年次は、これらの学問の理論となっている精神分析・構造分析について書かれているテキストを読みました。2年次演習ではジャック・ラカン「エクリ」、3年次演習ではソシユール「一般言語学講義」、ジル・ドゥルーズ「差異と反復」を読み、割り当てられている章の解説を行いました。哲学書なので初めは容易に読むことができませんでしたが、少しずつ慣れ、徐々に理解していくことができました。発表後は先生が分かりやすく解説くださるのでより深く理解することができました。3冊を通して、この分野の奥深さを知ったと共に、従来の経済学にはない新しい観点から経済を学ぶことができました。ゼミ生が少ないこともあり、先生に教えて院生の方々とお話する機会が多く、様々なアドバイスをいただくことができました。

今後はゼミでの学びを活かし、就職活動や卒論執筆に取り組んでいきたいと思っています。



### ■奥田以在ゼミ

文・中林 真菜

こんにちは。奥田ゼミ六期生です。私たちは、奥田先生のご指導のもと、京都の職人や老舗に関する研究を行っています。研究はグループ毎に行っており、実際に職人さんのもとを訪れて直接お話を伺っています。私たち六期生は四つのグループに分かれて、京人形や寺社建築、畳、京友禅を研究しています。研究以外のプロジェクト活動として、ゼミの三学年が集まり親交を深める合同ゼミの運営や、一年をかけてメニュー決定から販売までの全てを行う大学祭EVE祭への模擬店出店など、様々な取り組みを行っています。また奥田ゼミでは研究やプロジェクト活動の他に、ゼミ生同士の親睦を深めるために夏のBBQや忘年会などの懇親会を定期的に開催しています。体育会の部活に所属していたり、教職課程を選択していたりと忙しい学生が多いゼミですが、ゼミ生全員がゼミ活動に妥協することなく熱心に取り組んでいます。以上のように奥田ゼミでは、様々な活動を通して豊富な経験をさせて頂いています。



### ■小野塚佳光ゼミ

文・外西 祐也

私たち小野塚ゼミは国際政治経済をテーマにしており、おもにヨーロッパに焦点を当てて学習しております。活動内容としては毎学期、一冊の欧州危機やEUに関する本を輪読し、その内容や自分たちの考えなどを班に分かれて発表しました。そして、その際に出た疑問点を小野塚先生と話し合うことで理解を深めています。

ゼミ関連科目では、翌年度の卒業論文のテーマを決定するため、個人で興味のあるテーマについての本を一冊読み、発表しました。発表後は先生からフィードバックを頂いたことで、卒業論文の構想が固まりつつあります。

日々の変化の激しい世界情勢ですが、その状況を正しく理解したグローバルな視点を持った人間になれるよう、今後の卒業研究に励んでいます。



### 鹿野嘉昭ゼミ 文・久保大和

みなさんこんにちは。私たち鹿野ゼミは金融学の権威である鹿野教授の下、日本経済と金融について学んでいます。2019年度は、主に鹿野先生指定の文献を購読し、英文和訳を含んだプレゼンテーションを行いました。時には厳しい指摘をいただくこともありましたが、難解な本を熟読し、自分なりに要点をまとめ、論理的に相手に伝えるというところは、社会人になってからも大いに役立つものだと思っております。また、ゼミ以外では比較的自由な時間が多い鹿野ゼミですが、縦や横での飲み会等随時開催しており、先輩方からは非常に有意義なお話を聞くことができていると思います。

就職においては、鹿野先生に鍛えられた深い知見を生かして、金融機関に身を置く人が多いと感じております。



### 菅一城ゼミ 文・石田輝

私たちは各自興味のあることでテーマを決め、卒業論文に向けて研究をしています。1セメスターに1人2回の発表があります。新しく研究したことや発見、自分の考えなどを発表します。その際メンバー全員が感想や質問を言い、発表者のテーマに沿って議論をします。議論を行うことで自分では気づかなかったことや先生からの意見をもらい、自分のテーマや研究の方針などを確認するものへとしていきます。

またメンバーの研究で議論することで様々な経済事象や社会的問題など、普段接することのない問題や自分のテーマに似た分野など多くの分野に触れることが出き、視野が広がります。自分の研究テーマなど決まった分野だけでなく皆さんの事象に触れることができ、議論ができることがこのゼミの良さだと思っています。



### 高井才明ゼミ 文・大島 拓朗

本年度の高井ゼミは、新たに17期生24名を加えた総勢74名で活動しています。本年度のゼミでは、15期生はPythonに関するテーマの卒業論文の執筆、16期生はJavaScriptを用いたゲーム制作やWebサーバを利用したアプリ開発、17期生はウェブページのデザインと制作といった課題に取り組み、高井先生にご指導いただいております。

また、夏休みには台湾合宿を実施し、台湾の半導体産業の拠点である新竹サイエンスパークの視察や台湾の社会生活を身で体感してきました。授業での取り組み以外にも3学年そろっての縦ゼミや懇親会をはじめ、忘年会や各種レクリエーションなど縦横ともに交流の機会が増えました。ゼミの課題ではグループの協力が不可欠であるため、これによってチームとしての結束が強まりより良いゼミ活動になってきています。

これからも先輩方の一層のご活躍を心からお祈りするとともに、今後とも私たち後輩へのご支援をよろしくお願いいたします。



### 竹廣良司ゼミ 文・樋野晃大

わが竹廣ゼミは、「企業の実証分析」のテーマの下、企業の組織や戦略、企業間関係についてグループで研究・発表しています。統計ソフトSASの授業も関連科目として学び、1月にはSASを用いて小林ゼミとの討論会も行い、各グループが作成した論文を発表します。今年度は11月に開催されたディベート大会に向けてゼミ全体で取り組みました。約半年間にわたる準備の結果、準優勝や3位の成績をはじめ、3チームが本選に出場することができました。こうしたゼミ全体での活動に加え、私たちのゼミでは個人の課外活動にも積極的に取り組む風土があり、春学期には経済学部学生プロジェクトに多数参加し、上場一部企業との企画プロジェクトに積極的に取り組みました。現在3回生は就職活動が本格化し、ゼミ活動と並行して多忙な日々を過ごしています。その中で、自分と向き合い、多くの困難や壁に遭遇します。しかしこれまでのゼミ活動を通じて得た学びを生かし、これからも日々邁進していきます。今後とも竹廣ゼミをよろしくお願い致します。



### 田中靖人ゼミ 文・星野 佑哉

私達田中ゼミは、学生自らが考え行動する『学生主体』をテーマに掲げ、日々活動に取り組んでいます。成長のために何が必要なのかをゼミ生同士で話し合い、常に目的意識を持ちながらゼミを作り上げていきます。

今年度は主に2つの活動に取り組みました。1つ目は経済学部のゼミ紹介に関するフリーペーパーの作成です。より多くの学部生に読んでもらうために、周辺の飲食店の特集やゼミ選びに悩む学生のよくある質問に答えていくコーナーなどの内容を加え、創意工夫を凝らし、より目を引き楽しめるものを目指しました。2つ目は論文大会WESTの運営・執筆です。論文大会という非常に難しいテーマに対し全力で取り組むことで普段の生活では経験することのできない貴重な経験や大きな成長に繋がることができました。これからも田中先生に見守られながら主体的にゼミ生一丸となって活動に取り組みしていきます。



### 谷村智輝ゼミ 文・橋本 佳菜

私達谷村ゼミでは、資本主義経済とグローバル化をテーマに活動しています。

3年生(17期生)の活動を例にあげると、主に2点の内容を取り組みました。それらは、①テキストの輪読を通し日本経済の生産性について理解する、②産業研究となります。②に関しては、各グループで研究テーマを設定し、1学期間かけて進め、研究成果は、他大学との合同ゼミで発表しました。谷村先生や先輩方のご指導のもと、試行錯誤しながらも、研究に励んでおり、今後は、卒業研究への接続に向けさらに発展させていきます。

また、学業外の面でも、各学年でコンパやBBQ、またスポーツ大会なども企画され、先輩方が大切にされてきた「オンとオフ」のメリハリも健在です。私達の学年は、明るく元気な人達が多く、とても仲が良い学年になっていきます。

2020年度も、ゼミ生一人一人が高い意識をもってお互いに高め合いながら、これまで以上に素晴らしいゼミにしていきたいと思っております。



### ■角井正幸ゼミ

文・宮下直貴

私たち角井ゼミの演習テーマは「アメリカにおける経済問題の実証分析」です。2年次には、DARWINを用いてデータからアメリカの経済問題を考えました。3年次の春学期にはピケティ氏の『21世紀の資本』を読み、アメリカ経済がどのように発展してきたのかを学習しました。秋学期から4年次にかけては卒業研究として、各々がアメリカにまつわるテーマを決め研究しています。

私たち角井ゼミは、学生の主体的な参加を重視しており、毎回のゼミの多くの時間は学生が研究をするための時間として使われています。また今年度の三回生は全員が異なる研究テーマを選択しているために、個性や主体性を感じることが出来ます。

学生が主体となって進めていくゼミは予想以上に難しいことも多いですが、角井先生の場に応じた適切なサポートのおかげでここまで学習することができました。今後は今以上に活発なゼミ活動になるよう、ゼミ生一同積極的に主体的な参加をしていく所存です。末筆になりましたが、今後とも角井ゼミをよろしく願っています。

### ■上田曜子ゼミ

文・寺本裕亮

我がゼミ「上田ゼミ」では開発経済学を専攻している。この学問ではめまぐるしく変わる世界経済の中で解決すべき問題は何か、インフラ問題、人材育成、開発政策など様々な分野を学び理解することが求められる。授業では教科書の輪読や先生がその時々時事問題を投げかけてくださり、そこからGDを行う。自分の意見をしっかりと発言することや、周りとは多様な価値観を共有することの大切さを学ぶことができた。また3回生時にはWES T研究論文大会に参加し、自ら興味を持ったことを論文という形で研究発表することにも挑戦した。学んだこと、考えたことを文章でまとめること、わかりやすいプレゼンテーションとはどんなものなのかといった社会人になっても必要なスキルを身につけることができた。またこの大会では先輩方、現在の4回生、3回生と3年連続で分科会賞受賞という成績を修めることができた。学生の意思を尊重してくださる先生のもと国際的知見と、社会に必要なスキルの両方を学ぶことができ2年半を通して私たちは大きく成長できた。



### ■和田喜彦ゼミ

文・米谷海柊

私たち和田喜彦ゼミでは自然科学的観点から経済学の正しい在り方を考えるエコロジー経済学について学んでいます。同時に「現場主義」を掲げ、座学のみでなく実践的な活動によって持続可能な経済の実現に向けた研究を進めています。

2月に三重県四日市市で行った合宿では、四日市ぜんそくに関する資料を読み解くだけでなく当時を知る被害者支援団体の方や公害の加害企業からも直接お話を伺うことで多角的な視点で問題を捉えることができました。自ら足を運ぶことで初めて得られる発見も多く、現場主義の意義を再認識しました。

1月に全学年合同で実施された合宿では、4回生に卒業論文の内容と研究成果を共有して頂き、2、3回生は関心を持つ問題について班ごとにプレゼンを行いました。学年の垣根を超えた活発な議論を通して縦の繋がりが親睦を深めることができました。

来年度以降も新しく加わった2回生や留学生を交えながら充実したゼミ活動を継続していきたいと思えます。



### ■和田美憲ゼミ

文・澤田光太郎

私たち和田ゼミは「行動経済学」をテーマにして活動しています。この秋学期には二冊の本を通して、班ごとにプレゼンテーションを行い、「行動経済学」の基礎を学びました。今まで学んだことのない新しい経済学を学んでいく中でディベートや分析を行い、日々成長しております。

そして次の春学期からの活動については現在ゼミ生のみんなと話し合っていて、「行動経済学」を用いた実験のほかに企業訪問、合同ゼミ、合宿などを視野に入れて考えております。これらの活動を通して他のゼミにはない従来の経済学を批判するという点を活かした学習を先とゼミ生のみならず議論し協力し合いながらしていきたいと思っております。

最後になりましたがこれからも自分たちが主体で動き考え、工夫しながらゼミを盛り上げていきたいと思っています。どうか応援のほうよろしくお願いいたします。先輩方のこれからの活躍を心から願っております。



### ■八木匡ゼミ

文・土本真由香

私たちの学年のゼミ生の人数は約50人ととても多いのにも関わらず、ゼミ生同士の仲が良く、ゼミイベントも頻繁に行います。

2年生の頃はハロウィンパーティーと懇親会、3年生の頃はゼミ合宿と2、4年生との合同懇親会も行いました。

特に私たちの学年はイベント参加に積極的で、いつも多くのゼミ生がイベントに参加しています。個性が強いゼミ生たちが楽しくゼミ活動やイベントに積極的に参加できるのは教授である八木教授の人柄のおかげです。教授はゼミ生ひとりひとりをよく見ていて、また、ゼミ生のどんな相談にも乗ってくれる優しい教授です。そんな八木教授のチャームポイントは、意外とお茶目でノリがいいところだと思います。その為か

教授は女子生徒からも男子生徒からも愛されています。そんな八木教授だからこそ、個性の強いゼミ生たちが明るく楽しくゼミ活動を行っているのです。



### ■山森亮ゼミ

文・杭ノ瀬貴之

山森ゼミは、連帯経済をゼミ全体のテーマとしつつも、生徒それぞれ自分の関心のある分野内で問を立てて研究していくゼミです。所属している3回生は11名のみと比較的小規模なゼミであるとは思いますが、その分縦と横の繋がりが強く、はっきりと意見しあえる間柄のよいゼミだと思います。ゼミの授業ではポランニー氏やスキデルスキー氏など様々なヘテロドクスの意見を文献から学び、時にはゲストスピーカーをお呼びして活動について報告してもらったりすることで、社会問題についての知見を広げる事ができました。授業時間外では自らの問に即して何件かフィールドワークを行い、その内容を授業内で共有して良い所と悪い所を互いに指摘しあい参考にすることで、最終的に論文の形式に纏め、横浜で行われた横浜国立大学相馬ゼミとの合同ゼミにおいて発表しました。今後はこの経験を活かして、卒論の制作に向けて精進していきたいと思えます。



同経会役員名簿

役名	委員会	氏名	卒年
名誉会長		小嶋 淳司	S37
顧問		千 空室	S21
顧問		辻本 光彦	S25
顧問		川勝 泰司	S28
顧問		秋山 哲	S32
顧問		井上 礼之	S32
顧問		福井 正憲	S33
顧問		播島 幹長	S33
顧問		西尾 裕夫	S33
顧問		森本 弘道	S34
顧問		細見 吉郎	S34
顧問		西口 廣宗	S34
顧問		岩崎 隆	S35
顧問		吉田 忠嗣	S35
顧問		立石 義雄	S37
顧問		八田 英二	特別
顧問		谷村 智輝	特別
会長		服部 盛隆	S41
副会長		渡邊 隆夫	S37
副会長		高木 壽一	S39
副会長		中嶋 利宗	S40
副会長		北尾 哲郎	S46
副会長		岡田 博邦	S46
副会長		昌尾 一弘	S46
副会長		小平 真滋郎	S55
専務理事		鍵 圭一郎	H1
会計責任者		小杉 将之	H1
監事		横田 聡	H3
執行理事	総務	小林 敬三	S38
執行理事	東京	加藤 友禮	S40
執行理事	東京	濱田 浩實	S40
執行理事	総務	林 勉男	S40
執行理事	総務(つどい)	山本 忠男	S40
執行理事	東京	辻川 茂樹	S42
執行理事	総務(つどい長)	近藤 和夫	S44
執行理事	東京(長)	高橋 健治	S44
執行理事	総務	立木 貞昭	S44
執行理事	総務(つどい)	今出 健一	S46
執行理事	大阪	志賀 茂	S47
執行理事	名古屋(長)	萱原 昇	S47
執行理事	総務(つどい)	西村 猛	S49
執行理事	総務(つどい)	松尾 卓志	S49
執行理事	大阪	小川 佳秀	S50
執行理事	大阪	岸田 博	S50
執行理事	広報(長)	中島 信幸	S50
執行理事	財務(長)	吉田 誠吾	S50
執行理事	総務(つどい)	長田 宏	S52
執行理事	大阪(副)	新村 明男	S53
執行理事	大阪(副)	早瀬 孝行	S53
執行理事	東京(副)	松谷 哲	S53
執行理事	総務(つどい)	谷村 俊治	S54
執行理事	広報(長)	中谷 豊美	S54
執行理事	しめた	村田 市郎	S54
執行理事	総務(長)	河合 一郎	S55
執行理事	東京	山添 俊之	S55
執行理事	総務	高田 啓史	S56
執行理事	しめた	牧野 正裕	S56
執行理事	しめた	宮村 定男	S56
執行理事	企画	吉井 英雄	S57
執行理事	大阪(長)	土橋 純二郎	S58
執行理事	しめた	中野 耕太郎	S58
執行理事	しめた	若田 昌宏	S58
執行理事	東京(副)	阿部 聡一	S59
執行理事	企画(長)	荒木 勇	S59
執行理事	企画(副)	藤井 宏樹	S59

(2020年2月現在)

役名	委員会	氏名	卒年
執行理事	東京	末永 雅春	S60
執行理事	しめた	久保 行央	S61
執行理事	しめた	松井 勝史	S61
執行理事	大阪	小原 康正	S62
執行理事	企画	山下 泰生	S62
執行理事	企画	遠藤 裕策	S63
執行理事	しめた	前田 敦	H2
執行理事	しめた(長)・大阪	齊藤 賢一	H4
執行理事	名古屋	武田 卓也	H4
執行理事	大阪	清水 友紀	H6
執行理事	広報(編集長)	高木 伸浩	H6
執行理事	東京・企画	伊藤 弥生	H7
執行理事	大阪	植田 健一	H7
執行理事	名古屋	近藤 裕幸	H7
執行理事	大阪	太田 亮士	H8
執行理事	東京	志井 慶吾	H9
執行理事	大阪	馬場 圭吾	H12
執行理事	しめた・大阪	廣石 佑志	H13
執行理事	総務	八木 香織	H14
執行理事	しめた(副)	三輪 幸徳	H22
執行理事	名古屋	関本 駿	H24
執行理事	しめた	熊田 里沙	H27
理事		橋本 久幸	S38
理事		那須野 昌司	S39
理事		市田 之彦	S40
理事		山本 清	S40
理事		田島 繁	S41
理事		西畑 義昭	S41
理事		大江 美智子	S42
理事		高橋 修	S44
理事		平岡 昌高	S44
理事		田島 和憲	S45
理事		饗庭 一慶	S46
理事		池田 博義	S46
理事		杉田 啓三	S46
理事		吉田 進	S46
理事		岩崎 寿太郎	S49
理事		山本 源兵衛	S49
理事		神山 研一	S52
理事		石塚 清司	S53
理事		光田 周史	S54
理事		前川 宗博	S55
理事		鎌田 伸一	S59
理事		塩川 雅之	S59
理事		中村 恭俊	S60
理事		沼井 哲男	S63
理事		西村 裕子	H8
理事		塚崎 幸司	H11
理事		西田 憲弘	H15
理事		大谷 淳子	H16
理事		岡田 祐美	H18
理事		北川 雅章	特別
理事		西村 卓	特別
理事		鹿野 嘉昭	特別
理事		伊多波 良雄	特別
理事		竹廣 良司	特別
理事		新関 三希代	特別
理事		横井 和彦	特別



■横井和彦ゼミ 文・横井ゼミ一同

横井ゼミでは中国経済について多角的に学びます。数  
学的に理論を学ぶだけではありません。環境や法律、政  
治情勢など多岐にわたる要素に目を通せば、数字だけで  
は分からない中国経済が見えてきます。  
2年次演習と3年次演習1では、テキストを読み込み  
行うディスカッションで基礎を作りました。3年次演  
習2での、中国での会社設  
立のシミュレーションを行  
う「バーチャルカンパニー」  
は応用力が鍛えられました。  
予算や規制など様々な課題  
を1つずつ解決することで  
研究に深みが出ます。そう  
して積み重ねた知識や考え  
方が卒業研究に生きます。  
当ゼミは人の温かさを感  
じられます。先生との距離  
は近く、何でも相談できま  
す。学生間のつながりも大  
切にされています。中国か  
らの留学生や体育会で活躍  
する人、趣味に生きる人な  
ど色々な学生がいます。何  
かを話せば様々な意見が  
返ってくる。親身に答えて  
くれる人が近くにいること  
は一生の財産です。



■四谷晃一ゼミ 文・大原菜々子

2019年度の四谷ゼミは挑戦の年でした。人数も増  
え、勢いのある活動ができました。研究テーマである「教  
育と経済」についての輪読を通して理解を進めると共  
に、宮沢ゼミと関西学院大学田畑ゼミとの合同ゼミを6  
月と10月に行いました。6月は「外国人労働者の受け  
入れ拡大の是非」についてのディベートを行い、学生の  
多くが初体験でしたが準備を重ね勝利することができま  
した。10月には研究発表に取り組みました。二つのグ  
ループを作り、それぞれが「学校外教育による影響」「小  
学校英語教育導入の影響」という発表を行いました。  
また、今年度から新しく学部のビジネスアイデアコン  
テストとディベート大会に参加しました。両方とも手  
探りの状態から始  
まり、学生同士長  
い時間をかけて議  
論を積み重ねまし  
た。  
今後も、四谷先  
生のもと主体的で  
実りある活動がで  
きるよう努めて参  
ります。  
末筆ながら、先  
輩方のますますの  
ご活躍をお祈り申  
し上げます。





## 同志社大学経済学部 同経会

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入  
TEL:075-251-3524 FAX:075-251-3136  
URL: [www.dokeikai.com](http://www.dokeikai.com)

2020年4月1日 発行  
編集:同経会 広報・編集委員会  
発行人:同経会会長 服部盛隆